

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別放棄家畜種別第一二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一册一日発行)  
平成二十年三月一日発行(第四百一十一卷第三号)

# ホトトギス

三月号



## 俳句随想 〔三三九〕

汀子

ホトトギス系の俳誌がそれぞれ素晴らしい内容を競って毎月出版されているご努力に対して深く敬意を表してやまない。内容を豊かにしようとするご苦労をお察するが、中には安易に本を丸写しの頁になっているのも見かけて驚くことがある。書かれたものには必ず著作権があり、書いた本人の、或いは著作権者の許可が要る。許可さえあれば問題がないが、我々俳人は余り難しいことは考えないで、ただ俳句を作って勉強しているだけなので、あまり世間でいう難しい約束ごとを知らないままのことが多い。昔の話であるが、ある俳誌の扉裏にずっと虚子俳話が載っていた。それが完結したときに、それを一冊の本にしたいと申し入れて来たのにはびっくりした。最初の許可は亡くなった父年尾が出していたのかも知れないが、著作権者の母も亡くなり、今は高濱朋子がその役目を担いその都度私にも相談して掲載の許可を差し上げるようにしている。

人の文章の引用は何分の一が許容範囲で、それ以上になると許可が要る。著作権が五十年から七十年になると今論議がされている。

# 旬日記 汀子

平成十九年三月三日 芦屋ホトトギス会

すんなりと春めく日々を訝しむ  
早々と飾りし雛に頼む留守  
ひと区切りつきたる家路花ミモザ

三月四日 関西野分会

歳月や北の大地のクローバー  
ふり返る日々に立子忌ありしこと  
ふさはしき雛の忌日と申さばや  
入学を果せし報せ兼ねて来し

三月四日 下萌旬会

水草生ふどこかが揺れてぬし水面  
蛇穴を出でたる庭と承知して  
不発弾処理蛇穴を出づる日よ  
この会のまこと春めく日なりけり  
半分は街を抱きて春の山

三月五日 ロイヤル俳壇

早々と春告鳥を聞く山路  
今日よりは雛の宿として招く  
たまよりは吉野雛とて飾られし  
鶯の鳴きつぐことのなき日和  
滞在に若布の軽さたづさへて

三月八日 清交社

啓蟄の明るさにまづたぢろぎぬ  
土筆摘み来し手間のこと考へず  
風強き日よ土筆摘む野の起伏  
啓蟄や大地目覚めて行ける朝

限りなき大地の呼べる春風  
日本の山河忘れぬ燕よ

三月九日 工業倶楽部

菱餅の少し歪に揃ひたる  
踏み入れば春の山路でありしこと  
聞こえ来る木々のつぶやき春の山

三月十三日 大阪倶楽部

まだ探るに早き春子と思ひつゝ  
蛇穴を出づる逡巡あるやなし  
野遊に来てまで本を読んでをり  
いつの間に芽柳となりをりにけり

三月十三日 綿業倶楽部

雛遊 大人の世界ありにけり  
初雷といふ過ぎ去りてゆけるもの  
虫出しの大きな音でありにけり  
衿あしの白さは男雛にもありぬ

三月十四日 夏潮旬会

初花の期待に今日のありにけり  
春時雨かと仰ぎたる空青し  
虚子記念文学館の雀の巣  
春の風邪あなどりぬしにあらねども  
白がちに花増え五色椿かな  
この会に見るが慣ひの初桜

三月二十日 有恒倶楽部

芽柳に風まだそはず消えてをり  
彼岸てふことに従ふ旅路かな  
山笑ふとはどことなくさりげなく  
春椎茸 榎木 朝々見て歩く

三月二十日 無名会

生きざまを語りはじめて山笑ふ  
採れたての春椎茸を送り来し  
住む町の気に入つてをり山笑ふ  
六甲の裾はわが町山笑ふ

三月二十一日 ホトトギス社吟行会

体調を問はるることも春寒し  
旅一つあきらめしより春寒し  
身を一つあきらめしより春寒し  
雪解富士よかりし旅と聞くにつ  
見る限り春めく旅路なりしこと

三月二十二日 きさらぎ会

触るるとき水面光りて柳の芽  
岳麓の春なほ浅き旅路とて  
雪解富士語り尽せぬこともがな  
上るとも見えて明暗春の雨  
この辺の風芽柳に来て見ゆる

三月二十三日 時雨会

陽炎を抜け切ることのなかりけり  
種袋振れば命の音のする  
消息を問ふ陽炎のゆれてをり  
陽炎を行先さだかならざりし  
岳麓の耕はさもう少し先  
見ざるとも見たる如くに雪解富士

三月二十四日 旬会と講演の会

初花の消息 一喜 一憂 ず  
都心にも空地ありけり青き踏む  
三月の富士なほつごく旅話  
立子忌に吾も一過客なりしこと

三月二十五日 野分会

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年三月一日 蕉心会

如月や猫うにやうにやと餌を食み  
如月や匂やかな君迎へたる

山笑ひながら人間寄せつけず  
ものの芽に足裏疼いてをりにけり  
杉花粉この目何とかならへんか  
蟻穴を背面跳びで出でにけり  
如月や今日は何着て行こかしら  
水温むとは船音に水音に

三月二日 一水会

踏まれても踏まれてもぺんぺん草よ  
山笑ふ隣の山は黙すまま

三月八日 土筆会

蜆汁銘酒小鼓あればなほ  
物芽出づ世界遺産となりし野に  
虚子年尾ひさ志小幸よ涅槃西風

三月九日 六甲会

灯を消して雛の吐息を聞く静寂  
蛇穴を出でて仲良くしたいのよ  
紙雛といふ一塊の流れゆく

三月九日 虚子館投句

豆雛受付といふ落着きに

三月十日 明石の春を詠む吟行俳句会

子午線に立てば淡路の山笑ふ

三月十二日 朝日カルチャー若草句会

赤の花黄の花分けて青き踏む  
命守る如く屋根替してをりぬ  
万物の霊長として青き踏む  
青き踏む言葉はいらぬ二人かな

三月十五日 登高会

水温むこれよりは恋のみに生き  
雛納して洋室となりにけり  
温む水育つ蛇口の向う側

三月十七、十八日 関東ホトギス俳句大会

春の雪悲の君の便りとも  
富士太郎杉千年の花継げる  
絶景に春泥厭はざる佳人  
春塵の一粒もなき富士の景

三月二十日 草木瓜会

戦争も震災も見し雛の目  
雛飾る三百年を引き寄せて  
富士を見て六甲を見て青き踏む  
鳩 鴉 猫 犬 童 青 踏む

この道は花鳥諷詠青き踏む

見らるるを拒む雛の目差に  
来馴れたる稲城野といふ青き踏む

三月二十一日 ホトギス春の吟行会

葛飾野雲雀野となりゆく仔細  
公園の端から端へ青き踏む

駅名の長くなりゆく日永かな  
園うらら米軍基地といふ昔

三月二十四日 ホトギス社句会

踏青といふビル陰の一部分  
三月二十六日 比良八講  
八荒を誘ふ水の黙であり

三月二十七日 若水句会

バルチック艦隊のごと流水来  
闘牛の負けし歩みでありにけり  
闘牛の一步に泥の応へたる  
オーロラの使者流水に乗り来る

三月二十八日 目黒学園句会

母心嫁菜摘む手にありにけり  
嫁菜飯香る帰宅でありにけり  
苗木買ふ庭の華やぎ想ひつつ  
恋多き乙女の句座や山笑ふ  
潤む山笑ふ山まだ覚めぬ山

三月二十八日 百夜句会

花を来て邂逅の座となりにけり  
風船に親子の絆ありにけり  
タクシーを飛ばす桜の道選び

三月三十一日 シヤトーカミヤお花見吟行会

花冷を抜けてボルドーめく畑  
ムルソーにシャンベルタンに亀鳴けり  
ワイナリーてふ一塊の花の雲

花を見て花嫁を見て試飲して  
ウエディングドレスてふ花衣かな

# 雑詠

## 廣太郎 選

口下手で思ひのたけを文夜長 熱海 嶋田摩耶子

おしやべりは精神安定剤小春 同

出来たてのおむすび受けし掌の小春 同

夏負を少し気にして大会に たつの 浅井青陽子

この丘の松茸山で在りし日も 同

愛犬をたしなめて撮る秋日和 同

世遁れしごと葛原に隠れ棲む 東村山 村松紅花

吹かれをり宇宙の底の秋風に 同

鳩くぐりてもブラジルは地球の裏 同

風雅とは無為に非ずよ翁の忌 樞原 稲岡 長

初冬や静謐といふ野の姿 同

浄寂光土とは黄葉の透過光 同

柿の庭多し此処等も東京都 熱海 嶋田 一步

日本の青空がある柿を挽ぐ 同

ヒツチコックク深夜劇場柿を剥く 同

穂芒や湖に傾げば水の花 香川 湯川 雅

解けんと芒は風の捕虜となる 同

上戸には上戸の愁へ温め酒 同

通草もぐ森の雫にぬれながら 龍ヶ崎 今橋眞理子

山茶花の散りかかりては散らす白 同

木犀の路地潮風にひらけたる 同

大文字の火の妙法へとびうつる 福山 竹下陶子

手を引かれ来し子八朔木馬曳く 同

太古より人の詠ひし今日の月 同

人の世のたそがれや佳し花芒 神戸 山田弘子

大方は捨つる詩ばかり秋の風 同

色鳥や六甲といふ奥座敷 同

この赤は鬼も食はざる菌かな 福知山 大槻右城

神の山なれば落ちくる滝も神 同

涼しさはここが一番よと尼僧 同

白糸の滝の冬訪ふ人等かな 福岡 松尾緑富

冬の滝カメラに納め長居せず 同

登り来し冬の滝茶屋閉ざされて 同

露の世の果報に虚子と会へしこと 相模原 木村享史

虚子の指す方へひたすら露の道 同

露の道惑へるたびに虚子に問ふ 同

秋の蝶句碑を護りて頻りなる 大阪 佐土井智津子

鉦叩 音色 捉へし耳飾り 同

人の世の刻をきざみて鉦叩 同

野牡丹の紫早も暮れてをり 泉大津 故 盧田富代

手作りの針を運べり夜長の灯 同

金銀の芒夕日に銅となる 同

## 雑詠句評（二月号より）

しげ人・暮潮・昭代

比奈夫・二歩・くに彦

弘子・雅・仁義

純也・廣太郎

ビルにぶつかりながら月昇りけり 香川 内原弘美

林立する都会のビル。そのビルの陰に隠れては現れ、時間と共に高くなって行く月である。山から上がってくる田舎の月とは全く異なった趣である。

ビルに「ぶつかりながら」と叙したことで、都会の持っている硬さや乾きまでも十分に伝わってくる。「都会」の質感が月の光の硬さや孤高な美しさと通じ合っているのである。

都会の月の有様を的確にとらえた奇と言えよう。（しげ人）

ホトトギス社のある東京の丸の内も、今や高層ビルの建設ラッシュといつても過言ではないだろう。勿論そのビルの上には季節ともなると月が皓々と輝くが、この句はその昇ってゆく仔細を見事に言い当てている。最近のビルにありがちなガラスで覆われた壁面に映っている様子も想像出来る。（廣太郎）

水澄んでをり水深を失くすまで 香川 湯川 雅

秋のよく澄んだ水を見おろしたとき底まではつきりと見えるので・どのくらいの深さなのか見当がつかぬことがしばしばある。逆に深さの分からないことが澄む水の証明になる感もある。そんなときの措辞として「水深を失くすまで」と言った句は、私の知る限りない。この言い方は作者の感性の鋭さ、感受性の新鮮さを示していると同時に、巧みな表現にありがちな毒のいやみを伴っていないところがいい。（暮潮）

秋の季題である「水澄む」は、文字通り秋の澄んだ諸々の景のひとつを言い表している。実際この時期に池や川は、それこそ底まで見える。この句もそんな澄んだ水を見事に言い表している。「水深を失くす」という言葉から色々な景色を想像出来、拡がりのある句となっている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

子選

音信を問うてもみたし秋風に  
 生きてゐるものに忌日や神無月  
 葛の花咲けば暮れゆく吉野かな  
 鉦叩星に聞かせる菜ならん  
 九十五で生まれ替りて爽やかに  
 まだ明るいもう暗いなど云ふ秋か  
 たちちねの手を引き申し薔薇の香に  
 薔薇の香に逢瀬の如く待ちにけり  
 敬老の日の写真とて真中に  
 おほらかに熟れし南瓜をころがして  
 坐りたるところより秋風の吹く  
 突如沖に白濤あがる秋思かな  
 灯ともせば竈馬跳び来る手元かな  
 をかしさが跳んで悲しき竈馬かな  
 よるべなき風より細き芒の穂  
 日の匂ひ立たせて過ぎし初時雨  
 落葉透き寂光浄土と云ひつべし  
 茎漬の齒にはさまるもよしとして

龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 豊中 瀧 青佳  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同  
 たつの 浅井青陽子  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 仙台 赤川誓城  
 同  
 神戸 長山あや  
 同  
 榎原 稲岡 長  
 同

宵闇や星に光の戻りたる  
 句に集ふとは惚ふこと十三夜  
 残菊の情といふべきすがれやう  
 それまでに稲刈り終へてしまひたく  
 水底に水面が映り水澄める  
 金鈴子より目を移す金の鯉  
 露乾きゆく一山の音のあり  
 人声に大秋晴のありにけり  
 雨晴れて来る晴れて来る年尾忌へ  
 三猿子青虎も逝きし年尾忌に  
 石段があれば椅子とし紅葉狩  
 吾は風邪誰か腰痛紅葉狩  
 峰寺の道のそぞろに冬近し  
 日にゆるみそめし山気に散る紅葉  
 両の手に余る蓮根を掘り呉るる  
 蓮根掘る足の運びに気遣ひて  
 猿酒と笑うて柚の注ぎくるる  
 霧に古り山荘なつかしきさまに

宝塚 水田むつみ  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同  
 山田 弘子  
 同  
 熱海 嶋田 一步  
 同  
 同 嶋田摩耶子  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 福岡 松尾緑富  
 同  
 箕面 井上浩一郎  
 同

# 天地有情句評

汀子

たらちねの手を引き申し薔薇の香に 福山 竹下陶子

母上への孝養を四季折々に。

敬老の日の写真とて真中に たつの 浅井青陽子

日頃の謙讓の心の作者の為人。せめて敬老の日である。

坐りたるところより秋風の吹く 熊本 岩岡中正

秋風の吹く所に坐ったのではない。坐った所より吹いた秋風。

をかさが跳んで悲しき竈馬かな 仙台 赤川誓城

滑稽と表裏一体の悲しさを見た生きるための昆虫。

日の匂ひ立たせて過ぎし初時雨 神戸 長山あや

晴れた大地を通り過ぎる時雨。(以下略)

生きてゐるものに忌日や神無月

龍ヶ崎

今橋眞理子

亡くなった浅利恵子さんを偲ぶ十一月

鉦叩星に聞かせる楽ならん

東京

稲畑廣太郎

夜空の星を仰ぎながら聞く虫の音色

九十五で生まれ替りて爽やかに

豊中

瀧 青佳

常に失わない前向きの心。